



## 「ジャパン・クレートビア・アワーズ 2020」審査講評

ジャパン・クレートビア・アワーズ 2020  
審査委員長 村林 智・小嶋 徹也

クラフトビア・アソシエーション(日本地ビール協会)は、2020年2月39日、3月1日に恵比寿ガーデンルームにてクラフトビールの品質向上に資するため、日本国内で醸造出荷されるビールに特化した審査会「ジャパン・クレートビア・アワーズ 2020」(以下 JGBA2020 と呼称)を開催した。

今回は新型コロナウイルスの発生により、その感染拡大防止が要請される中、会場の換気、審査会場の空間確保、全関係者の手洗い・消毒やマスク・手袋の着用など感染症対策に万全を尽くしての開催となった。

このような中でも、47名の審査員と23名のスチュワードに奮ってご参加いただき、114社から出品された408銘柄(ケグ200銘柄、ボトル・缶208銘柄)のビールに対して滞りなく審査を行うことができたことは、まことに幸運であった。しかも、これらの数字は昨年の67社243銘柄(ケグ132銘柄、ボトル・缶111銘柄)と比較しても大きく増加したしており、上質な多種多様なクラフトビールをもとめる国内のクラフトビールの需要の高まりと、ブルワールの創作意欲の表れといえるだろう。

さて、審査会の名称のもとになっている"グレートビア"とはなにか？

本審査会においては、"バランス"、"アフターテイスト"、"状態"が秀でており、なおかつ飲む人の心に残る"魅力"を秘めたビールを指しており、この3点と"魅力"を重点的に評価し、数字で得点をつけるという方法を採用した。他と比べることなく、出品されたビールごとに絶対評価し、所定の点数を得たビールは全て受賞する。従って「インターナショナル・ビアカップ」では金銀銅の三賞を三銘柄のみを選定するのとは異なり、「ジャパン・クレートビア・アワーズ」においては受賞するビールの数に制限がなく、その点が大きな特徴となっている。

審査にあたっては、ビアスタイル・ガイドラインの基準にのっとりアロマ・フレーバー・バランス・アフターテイスト・状態・オフフレーバーのレベルを客観的に審査するとともに、そのビールの作り手のチャレンジや想いを前向きに評価することを心掛けた。

結果としては、

金賞(50点満点中45点以上) : 40銘柄(JGBA2019では、42銘柄)

銀賞(50点満点中42点以上) : 120銘柄(JGBA2019では、83銘柄)

銅賞(50点満点中40点以上) : 126銘柄(JGBA2019では、73銘柄)

全体最高点 : 48点(JGBA2019 最高点 48点)

となり、大変多くのビールが銅賞以上の受賞となっている。

二日間の審査を終えて印象に残ったことは、金賞を受賞することがいかに難しいかということである。ビールとしてのレベルの高さ、魅力、長所、個性が際立っていないと、合議による審査の絶対評価にて45点を超えるのは至難であった。実際、各審査においては45点以上を取得した出品があった際には、その拍手が起こっていたのがそ

の証であろう。特にフリースタイルにおいては出品ブルワーが意図したフレーバーの特徴、ならびに原料や製法についての説明が「デスクリプション」として提供され、これが採点にあたっての重要なポイントとなることもあり、昨年と比較して受賞率が低くなった理由の一つともなっている。

受賞ビールを見ると数年以内に開業した新規ブルワリーの名前も参照できる。また昨年同様、銀賞、銅賞が多いことから、国内のクラフトビールの基本的なレベルの高さが引き続き維持できていることの証明ができたともいえる。

最後に、世界的に大変厳しい世情の中、ビールをご出品いただいたブルワリーならびに販売会社の各位には、心からお礼を申し上げたい。また、感染拡大防止のための対策による不便がある中、ビールの審査に参加して下さった審査員の皆さん、準備・進行・管理にあたって下さったスチュワードの方々には厚く感謝の意を表したい。審査結果やコメントが出品者へのさらなる励みとして、消費者には魅力的な選択肢の提示として今回の審査会を通じて少しでも貢献できたのであれば幸いである。なお、今回は残念ながら審査本番終了後の「感謝試飲会」の一般参加は中止になった。参加を楽しみにされていたビールファンの皆様には事情をご賢察いただきご協力いただいたことに感謝の意を表したい。また笑顔で皆と「グレートビア」で乾杯できる日が来ることを心より待ち望んでる次第である。

